価値観をどう変革するか。人間疎外からどの程度解放されたかを価値観の基準とするとどうなるか。

生産と分配の変革，商品や貨幣のもつ意味の研究

人間観，教育観の変革……

これらの事柄を学習する為に，思考の正しいやり方，すなわち認識論の勉強をする。

4－1　武谷三男の三段階論，人類の自然観の変遷

ここでは1973年に筆者等が発表したものを使う②

4－2　弁証法について

ものごとを変化の中でとらえ，変化の原因はそのものの内部に主として存在することについてみていく。また変化の原動力としての矛盾についても学ぶ。

4－3　現代の疎外とその克服の道

以上の見方，考え方を用いて現代の諸課題を分析してみる。

例えば，社会を変化のうちにとらえることにより歴史を学ぶ態度を作る。社会変化の原動力は何か，現代社会の矛盾は何か，現在の生産方式が持つ矛盾は何か，公害は何故起るか，戦争は何故起るかというようなことも研究していく。

科学技術の最先端が，人間疎外克服の手段として使われているかをみていくことも重要である。そのことから現代の核戦略体系のもっている非人間性にも迫っていける。

4　あとがき

以上全くの素案を提示したが，今後グループ内での討論を経てこれを精選していきたい。実際に授業を行う際には次の点を留意したい。

導入は劇的に感性的認識から入れるように。展開と発展は，生徒同志の討論，先生同志の討論，先生と生徒の討論で深めていく。終結は，グループ又は個人で討論結果をまとめる。まとめ方は，劇，マンガ，紙芝居など多様な手段を使う。

注

①「“ゆとり”の時間を利用した総合学習の展開——中3における総合学習「人間について考える」の試み——その2　1　総合学習研究四年の歩みから」名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第28集（1983）P27　を参照

②「総合教科的学習指導をめざしての－試み——坂田昌一「科学の現代的性格」の指導を中心として——」同上紀要第19集（1973）P108

3．「ことば」について

白井　宏

ヒトは，その2本足で立ったとき，自由に使える手を持った。手は火を作り出し，さまざまな道具を作り出した。大地に垂直に立つということは，同時に，重い大脳を支え得る力学的構造を得たことにもなる。

2本足に支えられた重い大脳は，耳や呼吸器管（唇・歯・舌・咽喉・声帯などが，複雑微妙で多様な発声を可能にしている）と協力して，「叫び」や「うなり」ではない，「ことば」を産み出すことになる。

「ことば」は，感情や知識を他に伝え，また，自身の内部にそれらを蓄積した。弓矢や漁具にも劣らぬ利器として，生活を支え，文明・文化を創造発展させてきた。

「ことば」は，単なる道具ではなく，それ自体が文化になった。「ことば」は，単なる手段ではなく，それ自身が思想や芸術になった。もはや人類は「ことば」のない時代にひき返すことはできない。「ことば」のない生活は考えられない。「ことば」がなければ，それはもはや，人間ではない。

集団の利器として発生した「ことば」は，同時にその集団に対して，ひとつの制度ともなり，規範ともなった。人間と人間を結ぶ絆である「ことば」は，一方呪縛でもある。限りない知の世界を切り拓く鍵であるところの「ことば」は，人間を「ことば」の世界に閉じ込める洞窟でもある。

“ワンワン”という擬声語は，ほんとうの犬の鳴き声を聴く人間の聴力を奪ったかもしれない。“青い”という形容詞は，天空の深遠な美しさを見る人間の眼に眼帯をかけてしまったかもしれない。

「ことば」について考えることによって，あるいは「ことば」を通して，人間の過去・現在・未来について考えてみたい。

1　人間の「ことば」と動物の「ことば」

イルカやミツバチはどんな「ことば」を持っているのか。それら動物の「ことば」と人間の「こと

ば」とは，質的にはどのような違いがあるのか。つまり，「ことば」を持つことによって，人間は他の動物達とは決定的に異なった方向へ歩き始めたようだが，それはいったいどこへ向かう道だったのだろうか。さらに，人間だけが持っている，「文字」とはいったい何なのか。

2　「ことば」の獲得

ここでは，種としてのヒトではなく，個体としてのヒトが，どのようにして「ことば」を獲得していくかについて考える。狼に育てられたアマラとカマラの有名な話は，ヒトは生まれたままではまだ人間であるとは言えないこと，人間の中で育てられて初めて人間になり得ること，そこでの「ことば」の役割は決定的に重大であること，などを物語っている。つまり，微妙で運命的な特定のその時期に，将来人間になり得べき個体の中では，いったい何が起こっているのか。

3　「ことば」の力

「ことば」とは，すなわちものの名である。人間は，自分の回りに存在するものに名前を付け，そうすることによって世界を自分達のものにしてきた。このことは，「初めにことばありき」という『旧約聖書』や，『古事記』の地名伝説等，世界諸民族の創世神話に象徴的に現れている。ヘレン・ケラーを暗闇の世界から解放したのも「ものには名前がある」という観念，つまり「ことば」であった。

4　母国語と外国語

ヒトに「ことば」を教える最初の先生は，彼の母親である。母親は，他のどの教師よりも，愛情深く，根気強く，忍耐強い優れた「ことば」の教師である。その教師のもとで，ヒトはひとりの落ちこぼれもなく，「ことば」をマスターする。

しかし，離乳は「ことば」の世界においても必然である。母の「ことば」だけでは人間として生きて行けない。人間は誰でもバイリンガルを強いられる。方言と共通語，民族と「ことば」の問題について考える。人間は誰でも，母国語以外では完全に自由ではない。その不自由さの中で，ひとを愛し，ひとと戦う。

5　制度としての「ことば」

「ことば」は公共物であり，公共の制度であるので，個人による恣意的な使用はできない。最近の若い者の言葉づかいはどうだ，敬語がきちんと使えない，日本語が乱れている……いつの時代でもそうだ。　一方「ことば」は集団や民族の中で基本的には自閉しているので，その集団や民族の政治や習慣による恣意は防ぐことができない。自国を「自由主義国」と名付けている国に対して他国は，それは何からのどういう「自由」であるのかと問うことはできない。

6　「ことば」の未来

教育やマスコミが，あるひとつの「ことばの体系」に権威を与え（共通語），「ことば」から「生活の匂い」を剝ぎ取りつつある。

また，「意味」という，その豊饒さの故に文化であり，その多様さの故に混乱の因であるもの，いわば「ことば」の上に雪のように降り積んだもの，「ことば」のまわりに手垢のように付着したもの，それらを削り取ろうという考えがある。文学者はその重みに苦悶し，コンピューターは軽やかに，人間を含む全てのものを数字に置き換えて，今や確かに「豊かな新しい文明」を造りつつあるように見える。

4．食生活を考える

安　田　久　美

我々の食生活は何千年という歴史の中で一体どのような変遷を遂げて来たのであろうか。生きる為に必要な最低限の食物を確保することのみ目的とした時代が長く続いた後，現在では一部の恵まれた環境下では食物の過剰摂取が問題となっている。又，種々の化学物質の添加といったような新たな問題が生じて来ている。

「食生活の中で何が問題か」と生徒に尋ねると「食品添加物」「合成保存料」といった答えが直ちに返ってくる。しかしそれが何故問題であり，社会問題の中でどのような位置にあるのかを捉えているとは言い難